

〈書 評〉

玉田龍太朗著『ニヒリズムと無神論論争 フィヒテと三宅剛一』

晃洋書房、2024年

平井 涼

本書は、『フィヒテのイェーナ期哲学の研究』、『三木清とフィヒテ』に続いて、著者の三冊目となるフィヒテ研究の書である。これまでに著された研究から判断するかぎり、著者は大きく見てふたつの問題関心によって導かれて、フィヒテ研究に従事してきたように思われる。ひとつはイェーナ期のフィヒテにおける衝動論の問題を解明することであり、もうひとつはフィヒテと日本哲学の関連をめぐる問題である。

本書が後者をめぐる問題関心を継承しているという点については、書名からして一目瞭然であろう。前著では三木清が取り扱われたのに対し、本書では三宅剛一に焦点が当てられている。三宅が難解なフィヒテの哲学をどのように解釈し、理解しようと試みたか。さらには、こうしたフィヒテとの取り組みが三宅自身の哲学にいかに関承され、その思索を鍛え上げていったかが究明されている。三宅によるフィヒテとの対決が本格的に開始されたのは戦中期であり、その格闘の記録は講義ノート『ドイツ観念論に於ける人間存在の把握』として残されているが、著者はこの記録を丁寧に読み解き、当時における三宅のフィヒテ理解の水準の高さを示すことに成功している。後年、三宅が独自の哲学を構築する段階に至っても、フィヒテは三宅によって批判的に継承され、その思索に生かされることとなるが、本書ではこうした経緯についても再構成が行われている。

しかし、以上の問題関心と並んで、著者のもうひとつの問題関心が、しかも処女作『フィヒテのイェーナ期哲学の研究』以来の一貫した問題関心が本書に流れ込んでいるのを見逃すわけにはいかない。というよりも、本書のひそかな主題を形づくっているのはイェーナ期のフィヒテにおける衝動論の問題である、といっても過言ではないように思われる。付言するなら、この書評の筆者である私も同様の問題関心に導かれて、難解なフィヒテの哲学にアプローチしてきた。フィヒテと日本哲学の関連をめぐるのは著者による分析を傾聴するよりほかないが、イェーナ期フィヒテの衝動論に関してであれば、書評者としての役割を多少なりとも全うすることができるかもしれない。以下において、さっそくこうした作業に着手してみよう。

とはいえ、その前に、本書の基本的な構成を概観しておくことが先決だろう。本書は全部で七つの章によって構成されており、狭義のフィヒテ研究にあたるのは第一章から第三章までである。これらの各章には、ある注目に値する特徴がそなわっている。それは、当時の他の哲学者との関連のもとにフィヒテを置き、これらの哲学者による批判に対してフィヒテがいかに応答したか、を究明している点である。第一章ではヤコービ、第二章ではエーベルハルト、第三章ではシラーが取り上げられ、これらの哲学者とフィヒテとの相違がとりわけ衝動論の問題を背景に炙り出される。さらに第四章から第六章にかけて、三宅剛一によるフィヒテ解釈と、その批判的継承の諸相が描き出されたあとで、第七章では、ハイデッガーのもとで直接学んだ三宅の解釈をも援用しながら、『存在と時間』に至る初期ハイデッガーの思索が読み解かれている。

本書の以上の構成に基づくなら、この書評でとりわけ焦点を当てるべきは第一章から第三章とすることになるだろう。

まずは、第一章におけるヤコービとの関連から見てみることにしよう。フィヒテとヤコービの関係のハイライトにあたるのは、無神論論争のさなかに『フィヒテ宛公開書簡』において下されたヤコービの痛烈な批判と、それに対するフィヒテの応答である。しかし本書では、『学者の使命』講義を評価したヤコービがフィヒテの思索に期待を寄せていた、より初期の時点から考察が展開されており、両者の関係を広汎に視野に収めようとする努力がなされている。さらに、両者の関係を衝動論という観点から捉え直す試みには独自性が認められ、この点でも著者の論述は評価できる。

ヤコービによる『学者の使命』講義への注目には理由がある。人間の自由を衝動という視座から捉え直そうとしたフィヒテに、カントの道徳哲学を乗り越え、新たな地平を切り拓く可能性が見て取られたからである。こうした期待には、ヤコービ自身の問題意識が反映している。自らの関心に即した仕方、フィヒテが衝動論のさらなる展開にいそしむことをヤコービは望んでいたのである。

ところが、その結果は決してこの哲学者を満足させるものではなかった。もっとも、以上の点に関してはヤコービの側に誤解があったというべきだろう。イエーナ期の思索をとおして衝動論は一貫した仕方、展開されており、目下の問題に関して、フィヒテ自身の基本的な立場は揺らいでいないはずだからである。にもかかわらず、ヤコービにとって、自我から一切を説明するフィヒテの立場は「自己神格化」(4頁)の見地として映ずるようになる。知識学で容認されているのは「自我性だけの純粹衝動」(4頁)にすぎず、それゆえ、フィヒテが展開する衝動の概念は「内実のない単なる当為」であり、「空虚な理念」(5頁)でしかないという評価が下されるようになる。こうした両者のすれ違いを再構成することに、本章はさしあたり成功している。

さらに、こうした経緯に基づいて、両者の相違をより原理的なレベルから究明しようとする努力が見られる点でも、著者の意欲は伝わってくる。しかし、この点では、著者による分析には物足りない面がある。

スピノザのコナトゥスの概念と対峙しながら、独自の衝動論を展開しようとした形跡がヤコービには認められる。自我哲学を基盤としたフィヒテの衝動論にヤコービが同意しないのは、衝動についての独自の見解がその根柢にひそんでいるからである。なるほど、「あらゆる存在者のうちに神的な意志を見て取り、そこに必然的な法則を了解する観点」(9頁)によってヤコービの衝動論は規定されている。それゆえ、衝動は「それ自体で真にして善なるもの」(11頁)を、すなわち、知を超えた神的なものを目指そうとする。ヤコービの衝動論にひそむこうした方向性は著者によっても示唆されてはいる。しかし、本章ではその含意は十分に展開されておらず、それゆえ、フィヒテとヤコービの相違を完全に照らし出すには至っていない。この踏み込みの甘さが著者による分析に中途半端な印象を与えているのである。

第二章に至っても、こうした印象は依然として拭い去ることができない。本章では、無神論論争期のフィヒテに焦点が当てられ、「回想、応答、問題」という草稿が詳細に検討されている。ここでフィヒテが直面する論敵となるのはエーベルハルトであるが、両者の対立軸を形づくっているのは生と認識の原理的な区別の有無にあることがまずは指摘される。

エーベルハルトにとって、これら両者の区別は実質的には存在しない。「自然的で日常的な立場」、ないしは「日常的な生と学問とが繋がる立場」(18頁)に、この哲学者は立脚しているからで

ある。これに対して、直接的な生への内在から離脱した「意図的で意識的な立場」、すなわち「超越論哲学の立場」(18頁)にフィヒテは立脚している。生から思弁の立場を峻別し、「思弁は生を認識する手段に過ぎないとの観点」(19頁)を表明しているのがフィヒテなのである。生と認識を区別することができないエーベルハルトは、生から距離を取ることができずに、かえって生を認識に従属させてしまう。これに対して、認識の立場に立脚し、そこから生を観察するフィヒテは、哲学の内部で段階を踏んで生を再構成しようとする。もっぱらこうした枠組において、認識に対する生の基底性がはじめて確保されるのである。

生と思弁をめぐる問題はエーベルハルトのみならず、ヤコービとの関係を考察するにあたって重要な視座を提供するため、著者はフィヒテの基本的な立場をめぐって、さらに理解を深めることに成功している。また、ここで取り上げられた草稿では、道德主義的な立場を基礎とした宗教の問題の考察がフィヒテによって展開されているが、この点でも著者による再構成は正確である。宗教は生に、哲学は認識に属するため、両者はさしあたり峻別されるべきであるが、こうした区別を踏まえたうえで両者が結び付けられるなら、哲学は宗教に対して「教育的」(19頁)な効果を及ぼすことができる。最終的に、フィヒテはこうした考察を「宗教的国民教育」(26頁)の構想にまで発展させており、以上の問題関心が後年の『ドイツ国民に告ぐ』にまで継承されているのを鑑みれば、著者による分析は十分に射程の広いものであると見なすことができよう。

しかし、著者を信頼して論述に従ってきた読者であれば、期待を裏切られたという印象を抱かざるをえないのもまた事実である。第一章の最後に掲げられた予告によれば、無神論論争期のフィヒテの思索をとりわけ「良心」の観点から吟味することで、「衝動の概念のもつ可能性」をこの哲学者がどのように捉えていたかが解明されるはずであった(13頁)。本章において、道德ないしは宗教の問題を考察するにあたり、良心が果たす役割に焦点が当てられているのは確かである。ところが、こうして開かれた視野が衝動論とどのように関連しているのか、は依然として不明瞭なままである。予告された作業は完遂されることがないまま頓挫しているのである。

それでは、第三章はどうか。掲げられた予告はもはや顧みられることなく、新たな論敵としてシラーが登場する。

その代表作ともいえる『人間の美的教育について』で、シラーがカント美学を乗り越えるために、フィヒテの衝動概念に依拠して独自の美学を展開しようと試みたこと。にもかかわらず、この構想に満足しなかったフィヒテは、美学をめぐる自己の立場を明確化すべく、「哲学における精神と文字について」という論考を執筆するに至ったこと。フィヒテはこの論考をシラーが編集に携わっていた『ホーレン』誌に寄稿したものの、当のシラーによって掲載を拒否され、両者の間に決定的な亀裂が生じたこと。以上の経緯を中心に、両者の思想形成の過程が広範な視野のもとに位置づけられており、本書のなかで最も読み応えのある力作であるのは確かである。

しかし、その論述にはいくつかの問題点が孕まれている。筆者の立場から、特に以下の二点について指摘しておこう。

まず第一に、『人間の美的教育について』での、シラーのフィヒテ受容をめぐる問題である。第十三書簡において、「感性的衝動」と「理性的衝動」(ないしは「素材衝動」と「形式衝動」)の対立はいかにして調停されるかという課題が提起されているが、その解決のために援用されるのが「交互限定」というフィヒテの概念である。『全知識学の基礎』に従えば、この概念は、自我が非我によって限定される受容性の側面と、自我が自己を限定する自発性の側面を併せ持っている。異なる衝

動間の対立を総合するために、この交互限定という概念が有益であるのは、以上の構造に基づいて、感性による制限と理性の自由のあいだに調和をもたらすことができるからである。

にもかかわらず、著者はこの急所を捉え損ねてはいないだろうか。代わりに、「類比」という概念が過剰に強調されているのが気にかかる(39頁)。美を「現象における自由」と定義したシラーにおいては、この概念が重要な役割を果たしているのは確かである。しかし、フィヒテにおいては決して同断ではない。交互限定が「交互作用の類比」と見なされているのは、カントの交互作用のカテゴリーとの類比が示唆されているにすぎず、それ以上の意味をもたないと思うが、どうだろうか。

第二に、これはより重要な問題であると思われるが、フィヒテとシラーの関係がいささか単純化されてはいないだろうか。「フィヒテは、自分の道徳的な立場に即して、芸術も含めた全ての価値を究極的には道徳的な価値に還元する」(46頁)。これが著者の最終的な結論である。とはいっても、シラーの向こうを張って執筆された論考である「哲学における精神と文字について」では、芸術に対して一定の積極的な役割が与えられている。この論文には「認識衝動」、「実践的衝動」、「美的衝動」という三種類の衝動が登場するが、美的衝動には前二者を媒介する役割が賦与されているからである。認識衝動と実践的衝動においては、表象が対象に従うか、対象が表象に従うかという相違はあれど、両者の一致がどちらの衝動の側においても前提されている。これに対して、美的衝動は対象への直接的な関与を欠いており、もっぱら表象の側にのみ結びつく。しかし、美的衝動がもつこの特殊な性格によって、認識衝動と実践的衝動のあいだの対立ははじめて架橋されるのである。

著者もこの論考に着目してはいるものの、フィヒテによって示された芸術への肯定的な評価が看過され、その役割が過小評価されているのは気にかかる。もちろん、シラーとフィヒテでは、美学に与えられた重要性の程度が異なるのは当然である。フィヒテにおいて芸術が限定された役割しか担っておらず、道徳の問題こそが枢要であるという点にも、疑いを差し挟む余地はないだろう。しかし、美学の問題をめぐって、シラーとフィヒテのあいだには交叉する部分が認められる以上、両者の立場の相違を解明するにあたっては、よりきめ細やかな作業が要求されるはずである。この点を顧慮せず、過度な単純化が行われている点には不満が残る。

以上のように、本書は、著者のライフワークともいべきフィヒテの衝動論との持続的な取り組みの一環を形作っている。ヤコービやシラー、さらには三宅剛一といったさまざまな哲学者との関連のもとにフィヒテを置き、その思索の独自性を浮かび上がらせることに、本書はある程度まで成功している。しかし詳細に検討してみると、これらの試みには、さまざまな不備や首尾一貫性の欠如が認められる。それどころか、全体をつうじて有機的な関連性に欠けており、本書に収められた論考は総じて断片的な性格しか持たないという印象すら受ける。著者自身の言葉で解きほぐさずに、引用を連ねて分析に代える論述スタイルにも、率直に言って共感することはできない。

思うに、著者はフィヒテの衝動論と真摯に取り組む過程で、弛みない苦闘のなかから、いくつかの洞察をつかみ取ったのであろう。その成果が本書に収録された論考であると思われる。だとすると、著者の飽くなき探究が今後も継続されるに従って、ここに残された成果はより包括的な研究へと成長してゆくのではないだろうか。少なくとも、本書に収められた論考はその可能性を十分に秘めているはずである。